



玄関を入るとタイル張りのエントランスホール兼居話室が広がる。土間から板の間のリビングに目をやると山の緑が見え、家の内と外が一体になるのよう感じられる。

エントランスホールからダイニングキッチンへと広がる土間空間。ダイニングにライブラリスペースを設けたら家族との会話が弾むきっかけになりそう。



建具は空間に合わせて一つずつデザインをこなし、職人がつくっている。



盛りだつのある板の間は、縁台風のテレビボードや飾り棚など和のぬい、土間と仕切るアンティークガラスははるかな建具が和洋を調和させる役割を果たしている。



モデルハウス「風のくら」

## 家にいながら風を感じる 土間のある暮らしのススメ

モデル住宅「風のくら」は広い土間を中心とした空間デザインが魅力。家の内と外をつなぐ場所をうまく使った“うち時間”を楽しむアイデアを紹介します。



エントランスホールとダイニングキッチンを隔てる連続の壁にはアールの窓を設け、アイアンで装飾を施した。

アンティーク煉瓦を積んで壁スロープを設置。家の中で火をくべることでできるのは、土間がある家ならではの。



に薪ストーブのある談話室とダイニングをつくり、おくどさん(かまど)のあった場所にキッチンをつくりました。土間は土埃が立たぬようテラコッタタイル張りにして、洋風をデザインに。内壁はスベイン塗装で塗り上げ、アイアンやアンティークガラスを使ったアクセントをつけて、和と洋を融合させた現代古民家風に仕上げました。と、代表の三上侑比古さんは説明する。薪ストーブのある土間スペースはおうちカフェながら、接客はもちろんだこと、家族がくつろぐセカンドリビングとしてもうってつけだ。

お気に入りのアウトドアグッズや自転車を見せながら収納したり、趣味のコレクションや創作物の収納キャラリスベースにしたりするなど、確保できるスペースも広がる。何より、こうしたゆとりのスペースがあることで開放感が得られるという心理的效果は見逃せない。

かつての日本の住まいには「土間」があった。玄関戸を開けば建物の内と外をつなぐ広いまなざりがあり、ここ以外で使った道具や土の付いた野菜を置いてから、履物を脱いで座敷に上がるのが常であった。家の中なのに土足でよくて、雨の日だって汚れを気にせず作業ができるし、座敷に案内するほどでもないちょっとした来訪者の接客にも重宝した空間。それが、住宅事情の変化により、いつしか靴を脱いで家にあがるための最小限の広さと機能しか果たさなくなってしまった。しかし、今こそ便利で開放的で、家にいながら外の気配を感じられる「土間の魅力」に注目してみたい。

「ハウスランド社」のモデル住宅「風のくら」は、明治5年に建てられた、築150年の古い民家をリノベーションしたものだ。「もともととの間取りを生かして、通り土間

くつろぐ、もてなす、楽しむ、土間のあるライフスタイルを提案